
最後の審判

naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の審判

【Nコード】

N7991B

【作者名】

naoki

【あらすじ】

久しぶりに会った同級生。故郷の景色を巡ったあと、彼女は私に意外なことを訊ねてきた。

大学に入ってたつた一度だけ、彼女から連絡があった。

小・中学校時代を一緒にすごした同級生だ。声を忘れるわけはなかった。

「休みがこんなに長いなんて、詐欺だと思わない」

ケータイ電話の向こうで笑う声がする。いつもの、笑うときに少しだけ嘲笑するような響きになる癖は、やっぱり直っていない。

「実家に帰れってことでしょ。いいんじゃないの」

「だって、そのくせ課題だの集中だのやらせるのよ。大体、勉強したい人間が入ってきているのに、その恩恵を十分に享受させないのは不当よ」

どうでもいいことを散々話し合ったあとの話題がそれだった。わたしはいつもしていたように、彼女の抗議を気にせずに言った。

「なら、その詐欺な休みを有効活用するほかないんじゃない」

彼女はさっきよりいくぶん明るく笑った。

何度かのメールのやりとりをして、数日後、わたしたちは故郷の駅で会った。彼女はあらゆるところが昔と違っていたし、あらゆるところが同じだった（たとえば顔の造作や、話すときに相手の目を見る癖とか）。最後に会ったのは高校を卒業した直後だったと記憶しているが、再会はドラマのように劇的というわけではなかった。ただ意味もなく顔を見合わせて大笑いをし、変わったところを指摘し合い（やれ老けただの）、それだけで満足した。

「ねえ、まだ学校あるのかどうか見てこようか」

おどけた様子で彼女が言うから、わたしたちは駅からバスに乗って小学校に向かう。坂の下のバス停でわたしたちは下車した。長い坂を登ったら小学校だ。

「変わってないね、この辺は。紫陽花もまだあそこに咲いてる」

「前通ると必ず吠えてくれるあそこんちの犬も、憎たらしいほどに健在だわよ」

坂の途中の家の庭から、けたたましく犬に吠えられながら彼女は呟いた。

小学校には、日曜だから子どもはいなかったけれど、日曜だから中に入ることはできない。校門を通り過ぎて、校舎裏の山に入った。少し歩くと、そこから先は木々が開けて、高い丘に出る。そこからの眺めはなかなかのものだった。小学校の時はよく、帰りがけに寄り道をした。

「ああ……こうやって見ると違うね」

町を見下ろして、彼女がそういつた意味はすぐ分る。上から見下ろした景色は、小学校の時のそれとは異なっている。ずっと開発が進んで、家が増えて、代わりに木が少なくなった。田んぼや畑も減ったような気がする。

しばらくどちらも話さなかった。わたしにとってはそれはなんということのない沈黙であり、彼女にとっては恐らく意味があった。

「あのね。ごめんね」

あんまり突然だったけれど、わたしはさして驚かなかった。彼女が脈絡のない話をしたがるのには慣れている。ただ静かに聞き返すだけだ。

「何？」

「勝手にね、決めているの。私。絶対、最期に会うのはあなただつて決めているの。ごめんね」

解っているのに、違和感があった。何か、この何年かの空白が、彼女を変えたりするか。今話している彼女はわたしの知らないひとだろうか。

「……何かあったの」

相手から何かを引き出すための符合をわたしは発した。それは受け取られはしたが、返って来るはずのものは何もなかった。彼女はただ沈黙をわたしに寄越した。そしてそれは肯定以外の何者でもな

かった。けれど、ただそれだけだ。

彼女は振り返った。

「このことばだけを、あなたに訊きたかったの。最後にあなたにそう訊ねて、終わりにしたかった」

「……」

「あのね。…私もう、死んでもいいかな」

それはあんまり突然で、けれど予測できた突然だった。

わたしはただ、ああ、と言葉を濁したただけだった。もしかしたら、呻くような声になっていたかもしれない。

彼女は笑っていた。だからわたしは答えた。

「…うん。いいよ」

彼女はまだ笑っている。やがてその顔が泣きそうに歪んだ。視線を落として、それから顔を上げた。

「…酷いな。そんな風に言われたら死ねない。怒りたいの我慢してるって、顔に書いてあるよ」

「うん。怒ってる。許さないつもりだから。でも、きみが決めたらしょうがないでしょう」

それは本心だ。彼女が自分で決めたなら、仕方ない。でもわたしは許さない。死ねるものなら死んでみると言う。わたしが全力で妨害しても、死ねるものなら。

「そんなことを、訊きたかったの。なぜ。今、死にたいの」

「今死にたかったけれど、やめた。でも、ずっと思っていたのよ。あなたに最期に訊こうって」

彼女は歩き出した。丘を下っていく。わたしは後を追いかけるが、聴こえないように呟いた。

「最期の審判だなんて、死んでも御免よ」

遠くに蝉の声が聞こえた。夏の終わりは、間近に迫っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7991b/>

最後の審判

2010年12月31日23時51分発行